第9回 太田道灌

― 主家滅亡を予言した名宰相 ―

利発すぎた子供

室町時代の中頃、関東の地は古河公方と堀越公方、それに関東管領・上杉氏の3者が、三つ巴の戦いを繰り広げていた。

なかでも両公方の執事にすぎなかった上杉氏は、「管領」を僭称するまでに勢力を拡大。さらにはこの上杉氏は、4つに分裂した。事実上、最強の山内上杉氏に、扇谷上杉氏がつづく形となった(残る詫間は山内に追随し、犬懸は滅亡する)。

ところが、扇谷にあって家宰をつとめた太田道灌の、才覚がずばぬけていたことから、上杉氏ひいては関東の勢力図が大きく塗り替えられることとなる。

永享4年(1432)、相模国(現・神奈川県の大半)に太田資清の長子として生まれた道灌は、幼名を鶴千代、元服して持資、資長と称した。「道灌」は47歳頃に入道してからの、号である。

あるとき、利発すぎる鶴千代時代の道灌を、父・資清が訓戒した。

「よいか、昔から智ある者は偽りが多いという。偽りの多い者は、とかく禍をこうむる。人は障子のように真っ直ぐであるのがよい。曲がれば立たぬ」

それを聞いた鶴千代は、屏風を引きずって来る。

「父上、なれどこれは真っ直ぐでは立ちませぬが、曲げればほれ、見事に立ちまする」

資清は満面を朱にして怒ったが、返答に窮した。

またある日、「驕者不久」と大書した軸を、床の間に掛けた父が、その意味を問うと、鶴千代は、

「父上、その書に二字を、書き加えさせて下され」

と言い、彼は「不」と「又」を書き入れた。

「不驕者又不久」(驕らざる者もまた久しからず)

激した資清が扇子でわが子を打とうとすると、鶴千代は素早く逃げてしまったという。

無論、こうした早熟だけでは、後年の「太田道灌」は誕生しない。ここで見落とされがちなのが、その学識の高さであった。道灌は9歳から11歳まで、鎌倉五山の寺院で学問を修めていた。

「道真(資清)の一男鶴千代丸とて、世に隠れなき童形あり。9歳の比より学牕に入り、11歳の秋迄終に不帰父家。学雪の功績で、五山無集(双)の学者たり」(『永享記』)

少年道灌が室町時代の中頃、京都五山に並ぶ、東の漢学のメッカ=鎌倉五山にあって学識を積んでいたことは、特筆に価する。当時の両五山は、今日の一流の総合大学といってよかった。学問を積んだ道灌は、康正元年(1455)に24歳で家督を継ぐ。

その頃、太田氏はまだ、武州の荏原郡品川(現・東京都品川区)にいた。居館は御殿山辺りで、江戸に移したのは康正2年(1456)のこと――江戸城は1ヵ年で、ほぼ完成をみている。

この城は、それまでの山城の発想から大きく転換して、平地に自然の地形と人工の堀をうがち、土居(土塁)を築いて、複雑な曲輪を組み入れ、防衛力を飛躍的に向上させた斬新な城であった。

もっとも、この城は道灌の創始ではない。300年も以前から豪族・江戸氏が居城としていたもので、これを道灌が利用、独自に改築したものであった。

やがて彼の名は、その工夫した江戸城とともに、京の都にまで知れ渡った。34歳で上洛した道灌は、ときの8代将軍・足利義政に、武蔵野の後進性を質されたおり、即興で歌を詠んでこれに応じた。

わが庵は松原つづき海近く
　富士の高嶺を軒端にぞ見る

当方滅亡

もとより、歴代室町将軍の中で最も文化に造詣の深かった将軍義政は、歌心にあふれていた。のちの織田信長が、芸術の手本としたほどの人物でもある。

道灌の和歌に義政は、武蔵野の贅沢な景色を想い、なるほど、と大きく頷いたという。

文武に優れた道灌の活躍で、古河公方の足利成氏は、風前の灯火にまで追い詰められる。

ところが山内・扇谷の両上杉氏の当主が揃って病没。そこに京都を中心とした、応仁の乱が勃発した。

さらに扇谷上杉氏を継いだ政真が戦死、山内上杉氏の家宰・長尾景信も病没し、関東管領の首脳部は事実上、総入れ替えとなってしまった。

残留者は、道灌ただ一人となったわけだ。

こうした状況の中、景信の子・景春が、叔父・忠景に家宰の地位を奪われた、と叛逆。管領方は、足並みに乱れが生じた。

道灌はこの混乱を食い止めるべく、懸命に活躍するが、その手際があまりにも良すぎた。

人間はこぞって、生来、愚かな嫉妬という劣性を捨てきれないものらしい。

道灌の示した力量と実績を、敵のみならず味方が恐れ、これを除こうと企てた。

本来であれば道灌は、ここで“下剋上”に徹すべきであったろう。そうすれば、北条早雲（正しくは伊勢宗瑞）が名を成すよりも早く、道灌は関八州を制圧できたに違いない。

彼にはそれだけの力量、声望と実績、実力があったのだから。

にもかかわらず道灌には、最後の思いきりがなかった。足許の曖昧さ、とでもいうのであろうか、これはやはり育った環境と理解すべきかもしれない。

人間は生まれ育った環境――とりわけ、身についた精神性、生活習慣――からは、なかなか抜け出すことが困難である。

元来、関東の覇王たるべき力量の持ち主でありながら、身分的には極めて中途半端な位置にあり、それを当人はよく知っていながら、実力で決着をつけるという、決断を遅らせてしまった。

叛旗を翻す――それができなければ、身の安全を考えて、一刻も早く隠士（世捨て人）の生活を選ぶべきであった。

「――道灌謀叛」

希望的観測も含め、噂がしきりと関東全域に流れる中、両上杉氏が結託した。

文明18年（1486）7月26日、道灌は招かれた糟屋（現・神奈川県相模原市上粕屋）の、扇谷上杉氏の別館において、あえなく暗殺されてしまう。享年、55歳。

「当方滅亡」（『寛永資武状』）

肺腑をえぐるがごとき道灌の、最期の言葉はみごとに的中した。

道灌を失った扇谷上杉氏は、瞬時に機能を停止し、山内上杉氏との間では団結はおろか不和が表面化。両家の対立抗争は間断なくつづき、ついには両家ともに衰亡の一途をたどってしまった。　（了）

著　者
加来耕三

1958年、大阪市生まれ。大学・企業の講師を務めながら、著作活動を行う。

ただ今、加来氏が解説をつとめる『偉人・素顔の履歴書』（BS11・毎週土曜20時）が、絶賛放送中（見逃し配信64万回超えを記録）。